

「教師の自立」に寄せて

南陽市教育委員会教育委員 鎌田 一郎

教職について数年を経た頃だろうか。馴染みの珈琲店「S」のカウンターでいつものブレンドを啜っていると、店主のI氏からこう聞かれた。「鎌田君、学校教育は法的な制限の中でなされているわけだろう。君の自由な感覚、行動はかなり規制されるんじゃないか。「いや、自由にできていますよ」。偽らざる正直な気持ちで私は答えたが、彼が続ける。「教育基本法や様々な学校法に縛られてなされているわけだろう」。前後の議論は記憶の湖底に沈んでしまったが、このやりとりだけは今でも色褪せることはない。国策としての教育、その理念と構造への意識乏しく、個性の発露に軸足をあずけながら自足し、安穩としている己の状況が見透かされたようで悔しかったが、教師として担うべき根本への問いかけに違いなかった。日をおかずして私は、小学校への入学を控えた愛娘を思う彼の、父親としての心情にふれる。「いうならば、通過せよ学校・・・、というのかなあ」。

学びの本質は学び手が学びを通していかに成長するかであり、多様で個別的な学びの環境と呼応してしかるべきであろう。本来的には学校に行くことで学びが約束されるものではない。だが、現況を生きるに、学校教育、とりわけ義務教育との関わりは肯定的に踏まえざるを得ない。個性や持ち味、社会性や倫理観が磨かれる保証はなく、子どもの資質・能力や努力に反してその逆も起こりうる。健やかに強いられし学校という環境だからこそ、その中で自分のありようを完結させることなく未来に向けて・・・。娘よ、学校を通過してくれ。

教育改革のもとに、教育施策が増殖的に示されている。グローバル化が加速する中、世界で活躍する人材の育成が国家にとっての喫緊な課題とされ、連動し現場ではアクティブ・ラーニングの実践・実効化に腐心している。また、深刻さを増すいじめ問題への措置が行政主導でなされてもいる。だが、私にはこのような教育状況がしっくりと視えてはいない。批判的・複眼的に踏み込んで考え、自分なりの責任を付したものにしなければならず、現職の折も今も、その作業は常に現在進行形といえる。多分このことは、示された施策のパッケージやフォームをなぞり過ぎることへの自戒も含めて、私だけに限ったことではないは

ずだ。無論私たちは公教育の体現者であり施策の実践化・普及が責務であることは自明だ。肝要なのは、自分を賭しての自問自答を通した理念・論理・構造・方策の批判的、複眼的な再構成であろう。批判は嫌悪したり否定したりすることではない。物事の根本を踏み込んで問う姿勢であり、物事の自分なりの実像化は教師の内なる自立を支えるものだと思う。国や県、市町村の教育哲学や方法論がいかに優れていようとも、あるいはその逆でも、事の成否は子どもたちと生々しく関わる教師一人ひとりのありよう、日々の現実に懸っていることを思えばなおさらだ。

例えば、世界で活躍する人材の育成。世界の構造・関係性という視点から現状を照らせば、切実な国家の課題ではある。だが、世界では通用しなくとも、故郷に根付き素朴な日々を生きる多くの人たちの人生模様、教育がどう花開き込みわたるのか。表裏一体の課題として捉え心して実践しなければ、とりわけ義務教育の意義が薄れよう。

そして、陰湿に堆積する深刻ないじめ問題。いじめの根絶は教育に携わる者として異論はない。そのための調査や対処システム、外部機構との関係等が整備され指導体制が向上し、教師のみたてや関わりも細やかになっている。より嗅覚鋭く向き合わなければならない。だが同時に、いじめなんかで絶対に死ぬもんか、という心の力をしたたかに育むことが大事ではないか。どのような生き方をするにせよ、様々な困難や世情の辛さを避けては通れない。この二つの視点は矛盾するものでもなく、教育が担うべき深層なのだ。そしてまた、いじめ問題への取り組みは、いじめの現象・事案の奥底を洞察する根本的な生徒指導観こそが命綱になるものと思う。

知らず皮膚感覚に偏り、「いや、自由にできていますよ」と発した己への疑念、危うさの自覚とともに、I氏の学校観・硬質な眼差しは、今も私の思考に息づき私なりの教育観を陶冶している。学校は自由にできるはずもなく、かといって不自由に束縛されるものでもない。そして、未熟な子どもにやはり不完全であろう教師が愛情をもって関わるなら、学校は子どもたち一人ひとりの現在を彩り、未来にむけた成長の物語を紡ぐ場所になる、いや、そうしなければと私は思う。

地域総合型教育 ～地域と学校がつながる～ 梨郷小学校 ver.

『地域とともにある梨郷小の教育』というめざす学校像から、地域の方々にご協力いただき、食育や伝承文化などを学ぶ取り組みを行っています。様々な活動を通して子どもたちと地域の方々がかかわりをもつことで、子どもたちが地域の元気の源となり、地域に笑顔があふれる活動となるようがんばっています。



チーム龍樹

地域行事で「よさこいソーラン」の演舞を4～6年生で披露しています。



のびのびファーム

総合的な学習の時間などで、保護者や地域の方々に「ファームの先生」を依頼し、野菜の栽培を行っています。栽培した野菜は、被災地に送ったり、地域の朝市に出品したりしています。この活動は、2016年に農林水産省食料産業局長賞を受賞しました。



水辺の楽校

地域の方々が指導者となり、地域の田畑や川の調査活動を行ったり専門的な指導をしていただいたりしています。

地域と子どもが
つながる



地域の活性化



子ども龍樹太鼓

地域の方が指導者となり、伝承文化の「子ども龍樹太鼓」に取り組んでいます。南陽こども芸術祭や地区文化祭などで発表しています。



学校の畑

生活科や総合的な学習の時間で、保護者や地域の方々に「ファームの先生」を依頼し、野菜や米の栽培を行っています。

歴史と伝統の『鍾秀学校』

熊野大社の南に隣接する宮内小学校は、明治5年の学制発布の年に、佐野元貞氏の邸宅に開校され、新時代の学校教育を他地域に先駆け実践し、今年145周年を迎えた歴史ある学校です。当時の校名「鍾秀学校」には、優秀な子どもたちが育ち、学び行く子どもたちが「鐘（鍾）の音のごとく、世の中に広がっていく」よう願いが込められています。また、古き宮内は、文化が花開き多くの知識人が集まり、隆盛と文化を全国へ発信していた町でもあります。

『信頼される学校 ～鍾秀学校145周年～』を今年度のスローガンに掲げて、保護者や地域の方々から愛される学校づくりを進めています。

地域の皆様に愛され 誇りとなる 学校に



145周年のお祝いの年に力を入れてきたことは、「きれいな学校を作る」ことです。児童と職員の手で、愛情を込めて、“ともに”ていねいに校舎内外を磨き上げてきました。

きれいな学校は、そこで学んでいる人の心もきれいであればなりません。今年度は、新しく「鍾秀委員」を作り、全校で「いじめゼロ」の取り組みを進めてきました。1年生から6年生までの全クラスで、どうしたらいじめがなくなるのか、いじめをなくすためにどうしていくか話し合い、大きな紙に宣言を書いて貼り出して、“ともに”約束を守り、“ともに”思いやりの心をもって、みんなが学校大好きと言えるようにしていこうとする雰囲気を高めています。

歌声とあいさつが自慢できる学校に

学校から発信する歌声やあいさつの声は、地域の多くの人々の元気や勇気・心の安らぎを作ります。それを目標にして、朝夕にすばらしい合唱とあいさつの声が聞こえてくる学校を、自分たちで作り上げています。

また、今年、63年ぶりに復活した伝統ある宮内小学校の応援歌を、全校生が歌えるように練習して、運動会などの行事を通じて地域に発信してきました。各学級から選ばれた鍾秀委員や児童会役員が中心となって、歴史と伝統をつなぐ取り組みを創造しています。



「宮内愛」「鍾秀魂」を子どもたちに！

本校では、一人一人がふるさとを愛し、かしこい子・やさしい子・たくましい子を育てるために、また、未来に目を向け地域を担う子どもたちを育成するために、宮内地区、金山地区との連携を深めた鍾秀学を開催し、ふるさとの良さを歴史と伝統の中から学ぶ機会を位置づけてきました。

創立145周年を祝うために特別に設けた道徳の授業では、講師を宮内・金山地区出身の12名の地域の先生にお願いしました。1年生から6年生までの全学級で、ふるさとの歴史や文化、人と自然、建物などについて地域の先生から学んでいます。

今から18年前の平成12年に、児童・生徒が自発的に横断的・総合的な課題学習を行う「総合的な学習の時間」が段階的に開始された。学力をつける、教え込むことに躍起となっていた私にとっては大きな驚きだった。「総合的な学習の時間」を効果的に行うにあたっては、十分な準備時間が必要であるが、何をどうするのか、不安を抱きながら、「まあ、総合的な学習の時間の中で、行事の準備ができるか。」などと安易に考えたこともあった。先進校の調査を進めていく中で、子どもたちの輝いている瞳、嬉々とした表情にこの時間の意義、重要さを痛感し、授業準備に勤しんだが、なかなか不安感を払拭できなかったことを思い出す。

平成30年度から新学習指導要領先行実施により小学校3・4年生で15時間、5・6年生で15時間増の年間50時間の外国語活動が実施される。小学校の先生方の3分の2が英語の授業をすることになる。現在南陽市の小学校では、担任が授業を統括しながら全ての授業にALTが入り、安心感を持って授業が行われているが、来年度からは日本人教員が一人で授業を進める時間が出てくる。平成29年度、小学校教員に対するアンケート調査によると、約58%（69名回答）は外国語活動指導経験がなく、その多くの教員が発音や聞くこと、話すことに大きな不安を抱いている。

私は現在、南陽市内10校（小学校7校、中学校3校）を巡回しながら英語教育のノウハウについて指導を続けている。小学校では簡便な指導案を示しながら「外国語活動を通し、児童の夢を大きく育てる」という思いを込め、「して、みせて」いる段階である。熱心にメモを取りながら一緒に活動している教員が徐々に出てきていることは、大きな喜びである。ALTとの授業を参観すると、ALTを上手に活用し、授業者（担任）の思いのある様々な授業が展開されている。児童の実態をよく掴み、児童の表情を見ながら授業を効果的に進めることができるのは担任である。

今、教員は、多くの不安と外国語活動をしなければならないという負担感を感じている。それらを軽減し、外国語活動を推進するエネルギーに変えていくには多くの時間を要する。「困った、困った」ばかりでは前に進むことができない。しかし「困った」という思いがあるのならいい。それを何とかしようと努力するからである。今から備えてほしい、発音を鍛えること、クラスルームイングリッシュを自分自身のものとし自然に口から出るようにすること、ALTを捕まえ話しかけること、意識していればいつでも備える環境は整っている。英語は言葉。言葉だからだれでも使えるようになる。

「書くこと」に関しても多くの不安が寄せられた。「書くことはハードルが上がる」「どこまで書かせるのか」「どこまでの単語を覚えさせるのか」。5・6年生ではこれまで行ってきた内容に加え、大文字・小文字の識別、単語や文章を書き写す、代名詞、動名詞、過去形などの基本的な文や文構造を扱うことになる。5年生では、文字には名称と音の2種類の読み方があることを気づかせることを目的とした活動を行う。文字指導では、①大文字と小文字を「識別できる」②「読める（発音できる）」③4線上にきちんと書ける」3つの目標がかかげられている。ドリル的に教えるのではない、読んだり書いたりする必然性のある場面設定の中で活動を通して学習することが重要となる。場面設定をするのが担任の重要な役割であり、担任だからこそできるものと思う。活字体の大文字、小文字を一度に全て取り扱うのではなく、児童の実態に応じて一度に取り扱う文字の数や種類に配慮することができるのも担任である。

大学生の時にアメリカ人の教授から毎時間“r”の発音練習をさせられたものだ。お陰様で“l、r”の発音をしっかりと身に付けることができた。繰り返し、何度も練習し続けることが重要。これが今行う重要な教材研究だと思う。指導者ご自身が子どもたちとともに学び、外国語活動を楽しんでいただきたい。ALTやアドバイザーを大いに活用していただきたい。子どもたちに大量の英語のシャワーを熱心に浴びせ続け、英語を発したくなる授業を創っていけるよう、これからも情報を発信し、アドバイスしていく覚悟である。

【編集後記】

今年度、初めて南陽市に勤務し、もうすぐ1年が経とうとしている。前勤務地区では、「所報」のように教職員に向けて発信されるものがなかったので、当初はどのようなものがよく分からなかった。しかし、その編集に携わってみると、南陽市の教育についてや教育関係者の思い、各小中学校での取り組みなど、内容が豊富で読み応えのあるものばかりである。

特に、「No.235」から前回まで3号に渡って紹介された中学校区毎の取り組みで、地域総合型教育の中核をなしている「ネットワーク事業」について、各校区の特徴を生かした様々な活動が紹介されていた。読者の方々も興味深く読まれたのではないと思う。「ネットワーク事業」は、地域と学校が一体となり、各校区で工夫しながら取り組んでいるもので、新学習指導要領のキーワードの一つである「社会に開かれた教育課程」に通じるものが多いと考える。南陽市は、先を見据えた取り組みを行っていて、それが子ども達や地域の方々にも深く浸透していると感じた。本号から学校毎の記事が始まる。今後の記事も、個人的に楽しみにしているところである。

(大地浩幸)

【情報センター員】

◎安藤 淳（宮内中学校） ○大地 浩幸（中川小学校）
 内山 剛嗣（沖郷小学校） 佐藤 裕介（梨郷小学校） 後藤 昌幸（赤湯小学校） 網代 良一（中川小学校）
 加藤 直人（宮内小学校） 加川 雅人（漆山小学校） 遠藤 隆平（沖郷中学校） 高橋 良行（赤湯中学校）
 高橋 雅之（宮内中学校） 矢野 斉（南陽市教委）